

雨上がりに咲く花

シャイニール・ギフト

湊  
知花





1

日課の朝練を終えて、智花と二人、縁側に身を落ち着ける。  
「今朝は疲れたたろ？」  
「よかつたらマッサージしてあげるからそこに横になつてよ。」  
特にヨシマな気持ちを抱くわけでなく、そう切り出していた  
「え…いいんですか…？」

2

「それじゃお言葉に甘えて…」  
割と素直に縁側に寝そべる智花の姿に、少しドギマギしてしました。



1

あまの強くしてすきはならすいて、  
ふへんはきぎをんツサーツツいぬ。  
「あま…けつつ張つてるね…  
ムリさせちやつたかな？」  
「いいえ…平気です。」

2

「昴さんとの練習は  
楽しいですし…」

心なしか智花の吐息に  
艶かしさを感じるのは  
気のせいだと思いたい…が。



1

魔が差した、と言っべきか、  
ちよつと無茶なお願いを試してみた。  
「…つと、ごめん、あ…足を  
開いてもらっていいかな？」  
「ええ…ははは」

2

「あーっ…恥かかしてやう…」  
驚くほど素直に、  
その言葉に従う智花。



1

黙々とマッサージを続ける…  
今はハッキリと、喘ぐような吐息を  
漏らし続ける智花。

「あっ…んん…」

2

「はあっ…あ…んっ」

汗の匂いと智花の匂いが  
交じりあい、理性の籠が  
外れる感覚を覚えた



1

こうなること止まらない。  
従順な態度を見せる智花に、  
さらに「お願い」を試みる。  
「ね…智花…体操服、  
たくしあげてみて…？」

2

「……………」  
「おねえ…ねえ」

おずおずと  
智花が服を捲ると、  
なだらかな起伏と、  
桃色の頂きが  
目に飛び込んできた。



1

「あ…まだ  
ブラしてないんだっけ…」  
「はぁっ…そ…その、  
未発達なので…」



1

何も言わず唐突に、  
でもできるだけ優しく、  
ささやかな胸に手を伸ばす。

「あ……ん……あ……ん……ん……」

2

少し驚きながらも、  
嫌がる素振りを  
見せなかつたので、  
そのまま触り続けた。

「ん……ん……」





1

「あの…ち…ちつちゃくて  
ごめんなさい…です…」

消え入りそうな声で  
そんなことを言う智花。



1 「なに言ってるの。大きさが関係ない、智花の身体はちゃんと魅力的だよ」  
「ひゃう……」  
そう言っつて、ピンクの乳首を軽く舌で愛撫してみた。  
小柄な身体が軽く跳ねる。

2 「あ……ありが……」  
「んごまね……」  
身体を好きに弄ばれてるにも関わらず、お礼を言っちゃつあたり智花らしい。



1

おもむくに  
ふくらみの頂きを  
まるごと口に含む。  
強くないように  
乳首を吸い上げた。

「はあ……あはあ……ん♡」

2

眉をしかめる智花  
だったが、苦悶ではなく、  
経験したことのない  
感覚に戸惑っている感じだ。

「は……んっ、昂さん……  
赤ちゃんみたいですわね♡」

1

荒い吐息を繰り返しながらも、  
そう茶化してくれる智花が  
とても愛おしい。





1

少しずつ愛撫は下の方へ—  
さすがに焦りを見せる智花。

「いん…そ…そは…」



1

自分でも殆ど  
触れたことがないであろう  
敏感な部分に  
静かに指を添える。

「昂さん…  
や…やちんくして  
ください…♡」

2

「わかってる…  
安心して智花」

その声をかけると、  
強張つた身体から  
緊張が解けるのが  
見てとれた。





2  
きもち強めに、大事な  
入り口のあたりを  
つついてみる。  
「ひゅん……  
そっ……ふん……っ♡」

1  
「優しく」と意識しつつも  
愛撫する指に少しずつ  
大胆さが加わっていく。  
「あ……っ……ふん……っ♡」





2  
そんな言い方は  
逆効果も甚だしい。  
抑えられずにスパッツ越しの  
大事な秘肉を押し広げた。  
「あ…っや…  
ひろげないでっ…っ♡」

1  
「す…いね智花…  
スパッツこんなに  
濡れちゃってる」  
「ふあ…だめ…っ！  
そんな風に言っちゃ  
やです…っ♡」





1  
そのまま  
昇りつめるように—  
智花が絶頂に喘いだ。



1

「おはるさん…いじわるです…」  
「ごめんごめん…」  
「ちまうと調子に乗ったかな…」  
気恥ずかしげに  
オレを嗜める智花。

2

「…えと…その…  
場所を…替えませんか？」  
いきり立ったままの  
オレの股間を、  
恥じらいながらチラチラと  
盗み見る智花。  
朝練(?)は更なる延長戦へ――

1

とろろ替わってオレの部屋。  
どちらからともなく服を脱ぎ始め、  
二人とも一糸まとわぬ姿になつていた。

2

「ふあっ……お……おちんちんって  
こんなにおっきくなるんですわ……」  
屹立したペニスを、跪いた智花が  
おっかなびつくりと眺める。

3

「お風呂の時に  
お父さんのを見たけど、  
もつと小さかったですよ？」  
それは当然だろう。  
娘を前にして勃起してたら大問題だ。  
忍さんはそんな人ではない。

1

「わ…んごんごん…」

先走りですっかり  
べとべとになっているペニスを  
興味深そうに撫で摩る。  
…てかもうすでに  
それだけで気持ちいい。

2

「ズンと…ズンとすれば  
いいですか？」  
「…んつとね、いきなりなんだけど、  
□でできるっ！」

手コキでも十分気持ちいいのだが、  
期待を込めてお願いしてみる。

1

「はい……、昴さんがお望みなら」  
間、髪入れずにそう応えてくれた  
智花が女神に見える。

2

「と……とりあえず  
お口に啜ってみますね？」  
「う、うん、お願いします」

3

「あ……んん♡」

大きく開けた智花の  
口腔内が妙にエロく見えて、  
次第に思考が奪われる感覚――





1

「ん……ちゅ……んん……」

ペニスの先端付近を、  
唇でぎこちなく  
愛撫してくれる智花。



1  
「いあ……はへえ……  
んむ……♡」

2  
口まわりを先走り  
べとべとにしながら、  
一生懸命な愛撫を重ねる。  
「あぁっん……  
気持ちいいよ智花……」

1

「はふ…んっ…  
えう…れる…っ♡」

褒められたことに  
気を良くしたのか、  
今度は舌を使った刺激を  
交えてきた。





1

「んむ……ちあ……れふか？  
すいある……ふあん……っ♡」

上目遣いでオレの表情を伺う  
智花だったが、実はちよつと  
刺激が物足りなくなってきた。



1

「……ごめん智花…」

苦しかったら

イヤイヤってしてね？」

そう断って、少し強引に、

ペニスを智花の口内に押し進める。





「ふんっ……んんん」

「……お母さまも智花……っ」

1

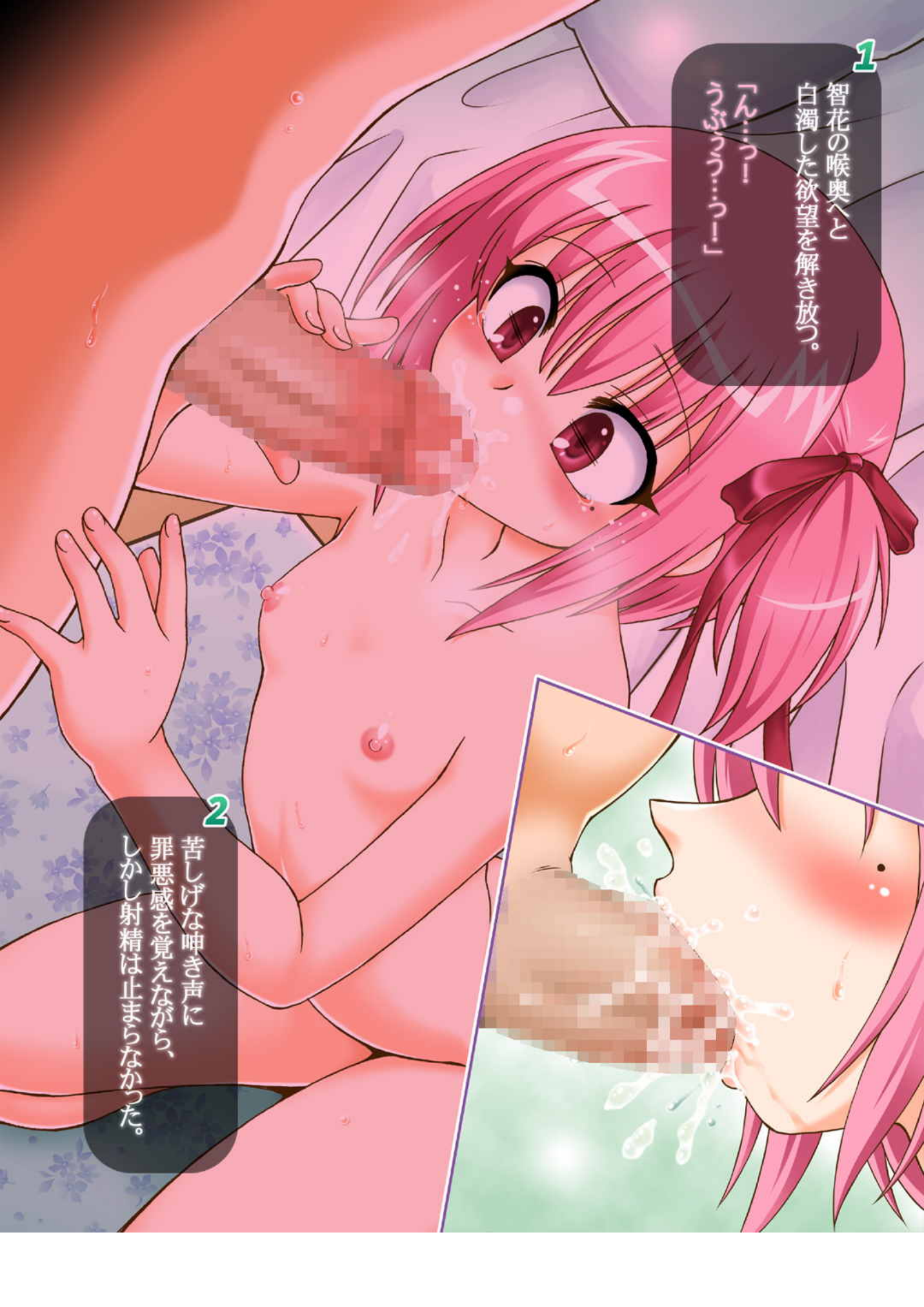
1

智花の喉奥へと  
白濁した欲望を解き放つ。

「ん……っー  
ご……ご……っー」

2

苦しげな呻き声に  
罪悪感を覚えながら、  
しかし射精は止まらなかった。



1

自分でも驚くほど、  
長く射精していた気がする。

「ん……くっ……んっ……んっ……っ♡」







1

我に返ると、  
眉をしかめながら一生懸命、  
喉に溜まった精液を嚙下する  
智花の姿があった。

1

「こ……ごめん智花っ！  
苦しかっただろ!？」  
「んぐ……っ……ふぁ……けら……っ」

2

涙目で咳き込む  
智花の口もとから、  
飲みきれなかった精液が  
垂れ落ちる。

1

「これ…精子って  
言っんですよね…？  
赤ちゃんの元になる…って」  
「あ…あうん」

2

「かわった味…ですね…。  
す…昴さんのだから  
不味くはない…ですけど♡」

そう言うてはにかむ智花の頭を  
オレは愛しげに、かつ目一杯  
くしゃくしゃに撫でまくって—

3

お姫様だつて、智花を  
ベッドへといざなつた。





1

智花をベッドに横たえ、足を広げてもらう。少し恥しらいを残しつつも素直に従ってくれた。

「えっ…と、じゃあ今だけでも…いいかな智花？」

2

キョトンとする智花。  
…これから「」をするのか理解している…と信じたい。

「大丈夫です。  
昂さんが望むままに…。  
…それが私の望みでも  
あります♡」

試合の最中によく見るような強い決意を宿した瞳がやたらに大人びて見えて愛おしかった。



1

「じゃ智花…  
力…抜いてね…？」  
いきり立ったペニス  
を  
智花の小さな入り口に添える。

2

「…あ…ん…」

さすがに智花の表情が  
少し強張った。  
見ない振りをして  
そのまま押し進め





1  
「はいっ…たよ智花っ…  
大丈夫…？」

思いのほかキツい  
締め付けから来る快感に  
耐えながら智花を見る。

2  
「ふぁ…はい…っ♡  
平気…ですっ…。」

破瓜の痛みに震えながら、  
弱々しくも微笑む智花。

「わたし…うれしい…  
です…っ♡  
こうして…昂さんと  
ひとつになれて…♡」



2

「んっ…うあ…っ  
…あはん…っ♡」

また痛みが強いのか、  
時折うめきに似た声が  
聞こえたが、少しずつ  
少しずつ、艶かしい響きに  
変わっていった。

1

ともすれば、智花の健気さに  
暴走しかけた欲望を抑え、  
ゆっくりと身体を動かす。

「んっ…うはっ…」





1

「あ……ん……ふあ……  
ひん……はひ……♡」  
智花の口から  
艶のある喘ぎ声しか  
聞き取れなくなった頃、  
さすがにうちの抑えも  
利かなくなってくる。  
「やあ……昂さん……♡♡  
……こえ……♡恥ずかしい声……  
出ちゃう……♡♡♡」

2

その恥ずかしい声を  
無理やり引き出したくて  
抽送のスピードは次第に  
速くなるのだった。  
「智花……♡……  
可愛いよすこ……  
もっ♡テロい声……  
聞かせてよ……♡」  
そして——急速に  
射精感が込み上げる。





1

「はっ…はあ…っ  
…は…らっ…♡」  
長いよつな短いよつな  
余韻に浸りながら、  
未だ夢見心地な智花と  
見詰め合う。

2

「え…と…  
よかった…のかな、  
ホントに腔内なかに出して…？」  
自分で同意を取って、  
なおかつ目一杯腔内なか出し  
しておきながら  
今さらな話した。  
しかもまだ繋がったまま★



1  
まだ少し焦点の  
定まらない瞳を揺らし、  
気を悪くする風でもなく  
智花は言う。

2  
「お腹の奥、あったかい……  
昂さん……わたし……  
とても——幸せですよ♡」  
——まゆこん  
「シャイニーギフト  
「雨上がりに咲く花」の  
二つ名に相応しい微笑みを、  
その満面に湛えるのだった。